

大火と都市の変貌

知恩院日鑑

〔江戸時代〕

御所御築地内ヨリ飛火ニ而、去六日昼九ツ過時分ヨリ類焼、中立売烏丸西入町外二百二十九町、物竈数五千七百八十六軒

利害を察し、其の便地を求め、乃ち定めて橋を置かしむ

と云々

京内の構成と町の発達

日本三大実録 貞観十三年〔八七一〕閏八月十一日  
霖雨未だ止まず、東京の居人の水損に遭う者卅五家、百卅八人、西京は六百卅家三千九百九十五人、穀塩を賜うこと各差あり

都城制の変質

百練抄 長承三年〔一一三四〕五月  
近日霖雨洪水、京中の路頭、往反通ぜず、七道五畿も此の愁いあり

洪水

京中における道路と川

日本後紀 大同元年〔八〇六〕九月四日

水の浸損、微かに積みて害となる、小沢に属すも功一箇に在り、而して人の監修なく、此の多壊を致す、宜しく衛門・衛士府、左右京の堤溝を専当し、勤めて修補を加うべし

京中における道路と川

御堂関白記 長保六年〔一〇〇四〕五月十一日  
鴨河上方一条より近衛御門末に至りて落水す

京中における道路と川

小右記 長和四年〔一一〇一五〕七月十五日

今日京中殊に雨降らず、而して紙屋河・堀河・東(洞脱カ)院大路河等水大いに盈ち溢れ、人輒すく渡れず、と云々、疑うに是、河上大雨歟

市街の新展開

中右記 長承三年〔一一三四〕五月十七日  
今朝雨脚殊に甚だし、庭前の水湛る、(中略)世間の河水大出し、河原の小屋皆以て流損す、京中の堀川西洞院河大出し、流死の者ありと云々、近代此の如き洪水未曾有と云々、鴨川・桂河氾々し、人全く渡らざるなり

京外への道

続日本後紀 嘉祥元年〔八四八〕八月五日

洪水浩浩たりて、人畜流損し、河陽橋断絶す、僅かに六間を残す、宇治橋傾損し、茨田堤は往往にして潰絶す、故老僉して曰く、大同元年の水に倍すこと四五尺たるべし

京郊の河川と橋

本朝世紀 康治元年〔一一四二〕八月二十五日  
近日、院の仰せに依て、鴨河大炊御門末以南を掘らる、諸国の吏各役夫を進む、是、白川御願寺等の水害を防せがなが為なり、民部卿頭頼卿此の事を奉行す

京外への道

文徳天皇実録 嘉祥三年〔八五〇〕九月二十三日

是より先の七月大水し、山崎橋断ず、帝おもえらく、河橋壊れ易きは水の浸嚙による、其の便地を得たらば、自ら害する所なしと、是の日詔して中納言安倍朝臣安仁・源朝臣弘・参議滋野朝臣貞主・伴宿禰善男等を遣わし、山崎に就きて以て

洛外への拡大

玉葉 承安二年〔一一七二〕五月二十日  
今日洪水殊に甚だし、六波羅辺りの人家、少々流れ了んぬと云々

京郊の河川と橋

殿曆 永久元年〔一一一三〕八月二十一日  
宇治橋流れ破れ了んぬと云々、十五間と云々、鳥羽殿人人宿所・御堂等の築垣破壊さると云々、河辺の莊園、皆悉く損す

橋梁の造営と河川の修理

名月記 建仁二年〔一一〇二〕五月十三日

辰の時許、八条殿へ参る、浄衣御襖に陪膳し了んぬ、出御す、甚雨洪水なり、東洞院を北行す、五条の東清水橋よりク、メ地路なり、雅清・少将・隆範の三人供奉す、大納言は輿に乗り参る、午の終、社頭に着す

#### 町の発展と庶民の息吹き

皇帝紀抄 安貞二年「一二二八」七月二十日  
去る夕より大雨降る、賀茂辺りの在家多く流失し、人多く流死す、永承以後第一の洪水と云々

#### 戦乱下の街道と橋の整備

園太曆 延文元年  
(正平十一年) 「一三五六」八月十七日  
今日、春日前神主師俊、使者を進め申す旨あり、彼の使云く、先日の洪水、宇治橋落ち了んぬ、橋柱に至り悉く流失す、又、真木(榎)鳥三分の二流失すと云々

#### 町かどの風景

満濟准后日記 応永三十四年「一四二七」五月二十三日  
四条・五条橋落つと云々、仍て京都の通路難儀なり、河原の在家百余家流失すと云々、男女又少々流死すと云々、不便々々、天災近年相続く歟

#### 町かどの風景

満濟准后日記 応永三十四年「一四二七」七月一日  
今日、風雨大洪水、三条以下河原辺りの小家数十間流失すと云々、不便々々、千度水に今五尺増すと云々、希代の事なり

#### 戦乱下の街道と橋の整備

建内記 嘉吉元年「一四四一」五月二十日  
終夜大雨、鴨川洪水、四条・五条の橋落□すと云々

#### 戦乱下の街道

実隆公記 永正七年「一五一〇」五月二十七日  
洪水以ての外なり、五条橋落つと云々

#### 戦乱下の街道

言継卿記 天文十三年「一五四四」七月九日  
洛中洛外以ての外の洪水、前代未聞の事なり、小川船橋等家多く破れ流れ、人多く死すと云々、下京家流れ、四条大鳥居流失し、四条五条橋落つ、山上黒谷坊中残らず流れ人多く死すと云々

#### 町衆自治の具体相

敵助往年記 天文十三年「一五四四」七月九日  
大洪水、京中人馬数多流失す、在家・町々釘拔・門戸、悉く流失す、四条・五条橋・祇園大鳥井(居)流失す、禁中西方の築地流損す

#### 河川と街道の保全

舜旧記 慶長九年「一六〇四」一月  
十日、巳刻、富森へ越了、横大路堤申付、板倉伊賀・片桐市正、大坂ヨリ来、予罷下、兩人へ折菓子二ツ捧之、一宿令「滞留」也  
十四日、横大路普請ニ板倉伊州下也。予罷越、折菓子捧

之、一段機嫌也

#### 河川と街道の保全

舜旧記 慶長十一年「一六〇六」一月十八日  
淀ヨリ伏見迄ニ堤ヲツカレ候付、富森ト両郷申談、堤之内、橋カケラレ候也

#### 河川と街道の保全

義演准后日記 慶長十七年「一六一二」八月二十六日  
一昨日京都近代ノ洪水云々、三条小橋モ流云々

#### 河川と街道の保全

駿府記 慶長十九年「一六一四」九月四日  
去月廿八日、大雨洪水、山城・河内・近江、方々堤崩れ、百姓流家溺死多しと云々

#### 河川と街道の保全

当代記 慶長十九年「一六一四」八月二十八日  
大洪水、(中略)伏見京橋水越、町中家五尺水有、(中略)此程、町中は成ニ舟道、京辺土堤、町人に宛被レ為レ築

#### 河川と街道の保全

長福寺文書 慶長十九年「一六一四」七月二十二日  
以上  
急度申遣候、去時分大雨ニ、梅津西ふし原堤破損、彼村田地悉新川ニ成候、依レ之堤修理申付候、来る廿七日未明ニ人足梅津へ可ニ相集一候、但高百石ニ付人足三人宛積普請場割付

候間、得<sub>レ</sub>其意<sub>一</sub>へく候、不足無<sub>レ</sub>之様ニ可<sub>レ</sub>罷出候、縦守護不入雖<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>御知行<sub>一</sub>、任<sub>レ</sub>御黒印旨<sub>一</sub>中十日御雇候間、堅可<sub>レ</sub>存<sub>レ</sub>其旨<sub>一</sub>也

寅七月廿二日 伊賀(板倉勝重)(黒印)

上山田村

谷山田村

御陵村

静原村

川嶋村

下津林村

岡村

牛瀬村

上久世村

下久世村

つき山村

大藪村

石倉村

庄や百姓(姓)中

**河川と街道の保全**

資勝卿記 寛永十二年「一六三五」五月二十日条

過夜ノ風雨ニテ木下宮内家流、三条橋へ流カ、リ、橋中間十五間流ウセ候也、五条橋モ少損シ申候由也、又、小川家流、亭主親子、下女流死由也

**河川と街道の保全**

鹿苑日録 寛永十二年「一六三五」八月十三日

大雨降り、終日晴れず、(中略)暮に及び京の堤壊れ、水大

いに漲る、当院の門前より水漲り、庭に漲りて板敷きの下に到る、庭濼尺に盈つ、路次に洪水漲りて川の如し、夜に至りて、巢松の前の路、水深きこと頸に及ぶと云々、水急にして渡ること能わず、奇怪なり、予、九歳にして住寺となり、今年四十七年、未だ此の如き大水を見ず

**東梅津村の村方騒動**

林忠治家文書 嘉永三年「一八五〇」

何分ニも同人義退役被<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>仰付<sub>一</sub>、後役之義者、乍<sub>レ</sub>恐当御殿様之御目鏡を以、百姓共気状可<sub>レ</sub>仕もの<sub>一</sub>江蒙<sub>レ</sub>仰候様相成候ハハ、百姓一同安心仕

**お土居の破壊**

元禄四辛未年 京都寛文九年「一六六九」  
書 狩野亭吉文書

東之方ハ、賀茂川筋水あたり所々崩込、又者寺町河原町裏ニ前代切崩候所有<sub>レ</sub>之候

**東梅津村の村方騒動**

林忠治家文書 嘉永三年「一八五〇」

御公用並村方道橋普請、諸勤化、其外村懸り之諸入用

**お土居の破壊**

京都御役所向大概覚書 正徳五年「一七一五」

東之方ハ先年加茂川洪水之節所々崩込又ハ寺町河原町裏ハ、前ニ切狭メ置候所有<sub>レ</sub>之、委細難<sub>レ</sub>記候

**東梅津村の村方騒動**

林忠治家文書 慶応二年「一八六六」八月

乍<sub>レ</sub>恐御見分被<sub>レ</sub>成下<sub>一</sub>候上、歛下年限御取極ニ而仰付被<sub>レ</sub>成下<sub>一</sub>候様

**東梅津村の村方騒動**

林忠治家文書 嘉永三年「一八五〇」

御公儀様御入用並御地頭方より之御余銀其外百姓共よりも高老石ニ付老及五分、猶又村中家別ニ銀三匁ツツ出銀仕、勿論人足之儀も予々冥加を相弁<sub>一</sub>江、無賃手弁当ニ而日々罷出、無<sub>レ</sub>滞普請成就仕候

**東梅津村の村方騒動**

林忠治家文書 慶応二年「一八六六」八月

玄米六拾石宛拾ヶ年之間御下渡シ被<sub>レ</sub>成下<sub>一</sub>候ハハ、其余<sub>一</sub>者村方高掛り家別に出金仕、夫々借財年々元利相済候様仕度

**東梅津村の村方騒動**

林忠治家文書 慶応二年「一八六六」八月

大借之儀ニ付、利分<sub>一</sub>者相嵩、元金<sub>一</sub>者相減シ不<sub>レ</sub>申、実ニ当惑心痛仕候

**東梅津村の村方騒動**

林忠治家文書 嘉永三年「一八五〇」

御普請場所見張として出役中之弁当料ニ貫ひ受候